パネル

失った靈魂だったのか。中世の葬送儀礼、とりわけ律僧の靈魂觀念のなかで、靈肉關係はどのように理解されていたのか、といった質問がなされた。岡田の発表に対しては、韓国での動物慰靈行事に対する仏教、儒教、キリスト教それぞれの反応について質問がなされた。井上の発表に対しては、現在大きく変化している韓国社会の葬礼文化との関連において、預修齋や四十九齋の担っている意味について質問がなされた。

その後、フロアの参加者からも、いくつかの貴重なコメントや質疑が出された。佐藤の発表に対しては、「カミになる」というヒトガミ信仰と、「カミにする」という「供養の文化」との間には断絶があり、ストリートにはつながらないのではないかと、松尾の発表に対しては、死者供養文化の形成における大きな枠組みとしては、密教が果たした役割が重要ではなかったか、といった質問が出された。また岡田の発表に対しては、実験動物供養と、献体された死者、ペットをはじめ蚕や食品など有用動物の供養との類似や差異について、井上の発表に対しては、韓国における四十九齋につづく年忌法要の現状や、死者供養とグリーンフワークとの関連などについての質問があり、活発な意見交換が行われた。

発表者の応答については割愛するが、これらの質疑は、今後の個別研究や共同研究の進展に生かされるはずである。「死者」を視野に入れた生活世界の再構築は、重要な今日的課題であり、「死者供養」を単に仏教文化の付随現象のひとつとしてではなく、宗教学が取り組むべき「救済」のテーマとして位置づけていく視点も重要になるであろう。

宗教間対話の思想

——歴史的諸相とそれらの対話——

代表者・コメンテータ・司会 八巻和彦

ノージャンのギベールとイスラーム

矢内義顕

一二世紀初頭、北フランスのノージャン修道院長ギベール（一〇五五年頃—一二二五年頃）は、第一回十字軍（一〇九六年—九九年）の歴史を記述した『フランク人を通してなされた神の業』（*Dei Gesta per Francos*）の第一巻で、「聖なる戦争」（*prelia sancta*）の思想、東方教会の墮落という誹謗・中傷、そして異端者ムハンマドの断罪を展開することにより、フランク人を中心としたエルサレムへの軍事的な遠征を正当化する。その特徴の幾つかを挙げよう。

第一に、本書の中には、宗教間対話の思想はおろか東西教会の対話という思想もまったく見出されない。そこで展開されるのは十字軍遠征を「聖なる戦争」として正当化する思想である。一〇五四年の東西教会の断絶は、この著作にも色濃く影を落としている。ギベールは東方教会の教理的・倫理的墮落と政治的な荒廃を断罪し、この墮落に対する神の罰としてムハンマドが登場したと考える。それゆえ、この異端に苦しめられる東方教会を救い、聖地エルサレムを奪回するために、教理的・倫

理的な純粹さを保持してきた西方教会からフランク人を中心とした十字軍が派遣されることは、「神の業」に他ならないと主張するのである。しかし、ギベールの東方教会への憎悪と敵対心は、彼個人に限られるものではなく、当時の西欧世界が共有するものであった。

第二に、ギベールは、ムハンマドとイスラームに関して、文書資料ではなく、おそらく十字軍遠征から帰還した人々がもたらした口頭の情報から得ており、その中には、一二世紀初頭としては正確な情報もわずかに含まれていたが、大部分は著しく歪曲されたものであった。しかし、彼はムハンマドに関する悪評の真偽を問わず、ただ悪人と決めつけ、正確な情報を得ようとはしない。西欧の中世世界は、このように歪曲されたムハンマド、イスラーム像を修正することはなかった。

第三に、これとの関連で、ギベールがムハンマドの宗教をキリスト教とは異なる宗教と見なしたのか、それとも、キリスト教の異端と見なしたのが問題となる。実際、本書においては、ムハンマドに「異教徒」(Pagani, gentiles)という語が使用されているからである。原則的には、彼は、ムハンマドを、東方教会の墮落から生じた、アリウス派にも匹敵する新たな異端と見なしていたと思われる。つまり、「異教徒」という語は、彼の異端性と東方教会の墮落をより強調するために用いられているのである。

最後に、ギベールが東方教会を誹謗する際、無酵母パンと酵母パン、三位一体の問題を持ち出すが、この点について述べておくことがある。彼は『自伝あるいは孤独な歌』(De Vita sua

sive Monodiae)の中で、若い頃、当時はまだベツクの副修道院長だったカンタベリーのアンセルムスから教えを受けたことを記している。このアンセルムスは、無酵母パンと酵母パンの問題について、それを「人間の考えの多様性」(humanorum sensuum diversitates)とし、寛容の姿勢を示し、また聖霊の発出(Filioque)の問題についても、『聖霊の発出について』を執筆し、東方教会に対して、西方教会の立場を理性的論証と聖書解釈によって弁明した。ギベールは無論このことを知らなかったか。またアンセルムスは、神学的な名著『神はなぜ人間となつたか』において、ユダヤ人、異教徒もキリスト教徒と同等に理性を有している以上、受肉の理性的根拠を探求し、ある程度は理解することができるといふ確信を表明した。ギベールも、『受肉について…ユダヤ人を論駁する』(Tractatus de Incarnatione contra Judaeos)を執筆しているが、この点に関する両者の関係については、今後の検討の課題としたい。

ラテン人への憎悪を超える

——ベツコスの転向について——

橋川裕之

一二八五年二月五日、ビザンツ帝国の首都コンスタンティノープルにおいて、終結まで半年を要することになる、重大な会議が開催された。この会議には皇帝アンドロニコス二世パレオロゴス(一二八二—一三二八年)とコンスタンティノープル総